

天寧寺
だより
玉琳

曹洞宗 玉琳山 天寧寺
〒460-0018
名古屋市中区門前町3-21
TEL 052 (321) 5865
FAX 052 (324) 8079
<https://www.temmeiji.net>
発行人：副住職 大野俊人

写経会
毎月28日 15時～16時半
仏教講座
第1・3金曜13時半～15時

謹賀新年

令和二年の初春を迎え、謹んで新年のお祝辞を申し上げます。ご家族の皆様のご健康とご多幸を心よりお祈りいたしております。



春は花 夏はとどぎす 秋は月

冬は雪さえて すぎしかりけり

〔道元禪師〕

木々の葉も落ちつくし、日増しに寒さの募るこの冬の日。季節には、季節ごとの装いや彩りがあります。春に花が咲き、夏にほととぎすが鳴き、秋は月が美しく、冬は雪がしんと降り積る。そのように季節ごとにそれぞれ

の姿があるからこそ、その風光を道元禪師は「すぎしかりけり」、清浄

であるがままの姿として詠まれたのです。それと同じように、我々人間の一生も、若く生き生きとした季節、老いて力の弱くなる季節、喜びのあふれる季節、悲しみに心塞がれる季節など、様々な彩りと陰陽に包まれています。しかし、そのような人生の季節を精一杯生きる姿こそ、清々しく美しいのではありますまいか。人の生死というもの、つまるところ「生来たらば生死来たらば死」であります。先ほどの歌に道元禪師は、「本来の面目」という題をつけておられます。すなわち、本来の在り方ということ。本来の面目は、春は花、夏はほととぎすというふうに着実に目前にあるということ

ありましよう。とはいえ、私たちの生の姿は迷いばかりであります。それに比べると、すでに仏となられたご先祖様方のお姿は、わずらうことも迷うこともなく、まことに「すぎしかりけり」というものであります。



降伏一切大魔最勝成就

天寧寺の三宝殿で行うご祈禱の際に無病息災と諸縁吉祥などを祈願して、『大般若波羅蜜多經』六〇〇巻というお経本を転読いたします。あらゆる存在は皆、空であるという理を説いたのが般若の教えですが、この般若の教えをまとめたものが大般若経です。唐の女奘三蔵が四年の歳月を費やして訳しました。奈良時代の頃は何日もかけて最初から最後まで読んで

ましたが、次第に略式化され、この経典を空中に翻す仕方です。読むようになりました。これを転読といひます。

このお経を一巻ごと転読するとき僧侶は「降伏一切大魔最勝成就」と大声で唱えます。一切の魔物を打ち破り、最もすばらしい幸いを成就したまえ、という祈願の句です。大般若経は一切は空であるという理を説いたお経であるのに、どうして魔物を降伏する力があるのでしょうか。

あらゆる姿や形は、因縁により生じては滅します。物事が因縁によつて生じるといふことは、あらゆる存在の本質は空であり、空であるから生ずることなく滅することもない「不生不滅」です。この存在の本質からみると汚れと清らかであることには何ら差異がないこととなります。そうはいっても世の中には常に不幸な出来事があり、それに遭遇するとき人が悲しんだり苦しんだりするのはもつともなことです。生老病死の苦

しみや会者定離の悲しみは、だれもが「我が身」において体験することでありませぬ。

しかし、人間という者は、常に苦しみを負うものとして宿命づけられているわけではありません。暗い夜も必ず明けて、さわやかな朝が来ます。人間という者は、苦としてあるのみではなく、仏の智慧と慈悲によつて恵みを受けている存在でもあります。

空とは何も無いということではなく、空であるから智慧があり慈しみがあるといふ喜びの表明です。慈しまれているといふ喜びを自覚するとき、あらゆる魔物はおのずから消滅し、すばらしい世界が開かれます。

「降伏一切大魔最勝成就」は祈願の文句というより、世界に充滿している慈悲（仏）との交信の言葉だといえます。仏と交信する言葉を真言または、陀羅尼、咒といひ、漢語に訳して総持といいますが、「降伏一切大魔最勝成就」は陀羅尼、総持の

性格をもつ言葉であり、自分自身を善き道へ向けよという励ます言葉でもあるのです。

仏の花

お釈迦さまが、お生まれになったとき、悟りを開かれたとき、涅槃に入られたときなど、釈尊の重大な転機には、いつも花や植物が関係しています。また仏教には、よく植物が譬喩に用いられています。われわれ日本人は総体的に植物・花が好きなのですが、遠くインドに発生した仏教が日本にもさかえたことには、ここらへんにも一因があるのかもしれない。仏教に関する花や木を紹介します。

●アショカの花（無憂樹）



お釈迦さまの生誕の時の花です。生母マヤー夫人が、出産のため生家へ行く途中、美しい花々が咲き乱れているルンビーニ園へ立ち寄り、赤い小

な花が房になって咲いているアショカの花をつもうとして右手を伸ばしました。そのとき陣痛が起き、出産されたのがお釈迦さまです。花の中で生まれたのを讃え、色とりどりの美しい花で飾った「花御堂」の中にかわいい誕生仏をおまつりして甘茶をそぐ「花まつり」または「灌仏会」の行事を行ないます。

母マヤー夫人は数日後に亡くなられました。母の死はお釈迦さまの生涯に大きな影響を与えました。

●菩提樹（ピッパラ樹）



お釈迦さまは二十九歳から六年間、難行苦行（難かしく苦しいヨーガの修行）をされますが、苦行は苦悩の解決や世の中の救済にはならないと考えられ、ガンジス川の畔のピッパラ樹の下で坐禅をなさり、思考を深めて菩提（悟り）を開かれました。したがってこの木を菩提樹と呼びます。

菩提樹は大木で、ハート形の葉つばを茂らせ、暑いインドでは快適な木陰をつくります。また黄色の小さい花をいっぱい咲かせ、種子は数珠にも使われます。

●サーラ樹（沙羅双樹）



二本のサーラ樹のもつとで、お釈迦さまは八十才の生涯を終えられました。その時天上より花が舞い落ちました。またその時、一本の木は枯れ、一本は残ったと伝えられますが、これは栄枯の相を表わしたものです。『平家物語』の「沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす」は有名です。沙羅樹は高木で、大形円すい形の淡黄色の花をつけます。日本では夏椿がそうだとされますが、別種の木です。



水の入った壺の水面が風で波立って

いたとしたら、この水は物を正しく映すことができるでしょうか。もちろん物をありのままに映すことはできません。それと同じく、私たちの心が貪りで波立ち、瞋りで煮え立ち、愚痴で腐っていたならば、私たちは正しく物を見ることができませんでしょうか。もちろんそれは不可能なことです。

この言葉は、釈尊が弟子たちに向かって話した言葉だそうです。

曇った鏡では、正しい姿は映りません。私たちの心も、鏡のようなもので先入観で判断したり持論をかざして他人の意見に耳をかさないのは、鏡が曇っているのと同じことで、正しい判断を妨げています。

貪り、瞋り、愚かさは、「三毒」

と云って、己を不幸にする源とされています。欲望や煩惱も三毒が端を発して起こります。つまり、三毒は、誤った心を作りだして、私たちを不幸に導いている元凶といえます。

心に邪なフィルターがかかっていたら、それを外すことから始めましょう。

心をクリアにすれば、正しい判断が可能となり、その結果、三毒は菩薩道に変わっていくのです。

ありのままを素直に映す鏡のような心、落ち着き払って正しい判断ができる心、これを「大円鏡智」といいます。この言葉は卒塔婆に書かれているのを見たことがあるかと存じます。

成道会(十二月八日)

天寧寺では十二月四日に愛知県第一曹洞宗青年会の青年僧により成道会を厳修し、お釈迦さまが悟りを開かれた遺徳を偲びました。



お別れの心得

非常な苦しみのことを「四苦八苦」



といいますが、この「四苦」というのは、「生・老・病・死」のことで、仏教では人生の苦悩の根本原因はこの「生・老・病・死」の「四苦」にあると教えています。「生」はもちろん、この世に生を受けるということ、「老」は老いること、「病」は病にかかると、そして「死」は、いつかこの世を去っていくということですが。

この「生老病死」は、自分が願っても願わなくても、むこう側から必ず来る苦しみです。自分から病気になるという人はいないでしょうが、気がついたらガンに冒されていたとか、また、死にたくはないと思っても死は必ず誰にでもやってきます。「死ぬことを忘れていてもみんな死に」という言葉があるように……。

お年寄り「死」についてこう言います。苦しんで死にたくはないとか、スーッと楽に死にたいと。それから人に迷惑をかけないよう、長く患わないでポツクリ往きたい。そして、できれば一人ぼっちでなく身内にみとられて

往きたい……と。これは当然の願い、自然な気持ちの表れだと思います。人は誰でも最後のときを迎えるのですが、いざという時のお別れの仕方というものは、なかなか自分の思うようにはならないものでしょう。でも財産を残すとか名を残すとかということよりも、心のもった挨拶の言葉を残してお別れができれば、とてもすばらしいことだと思います。

そのお別れの言葉で大切なのは、一つは感謝の言葉だと思います。奥さんに「永い間、ありがとう」というたわりの言葉をかけるとか、あるいはお嫁さんに「いろいろと苦勞をかけたね」とねぎらいの一言を残すということ。その一言で、あとに残される者がどんなに報われた思いがすることでしょう。二つには、「兄弟みんな仲良くして」とか「おばあちゃんを大事にね」とかという励ましの言葉です。これも大切なことだと思います。

心は言葉にあらわれるわけですが、最後のときに、安らかな心でいいお別れができれば、こんな素晴らしいことはありませんね。



令和二年 年回表

一周忌	令和元年
三回忌	平成三十年
七回忌	平成二十六年
十三回忌	平成二十年
十七回忌	平成十六年
二十三回忌	平成十年
二十七回忌	平成六年
三十三回忌	昭和六十三年
三十七回忌	昭和五十九年
四十三回忌	昭和五十五年
四十七回忌	昭和四十九年
五十回忌	昭和四十六年

法事のお申し込みはお早めに

少ないもので豊かに暮らす

修行僧は、昔から「三衣一鉢(さんいいつぱつ)の衣と一つの食器)しか持たない」と言われるほど、少ない持ち物で暮らしています。私が大本山總持寺に上山したときは、さすがに三衣一鉢ではないですが、行李(こくり)一つ分の私物しか持ち込みを許されませんでした。中身は、わずかな着替えと一組の食器、洗面用具、裁縫道具などの生活必需品です。

それだけの持ち物で暮らしてみたところ、意外にも困ることはなく、むしろ快適でした。物が少なければ、どこ

にあるか探したり、どれを使うか迷うともなく、物を管理する煩わしさがありません。ほかに必要な物があれば、道場の共有物を譲り合って使えばよいだけです。物がなくても平気だと分かるので、禅僧たちは物欲がなくなり、手放すことを恐れなくなります。物質的には乏しくても、心の豊かさを得られるのです。

近年は、物を他人とシェアしたり、再利用したりするためのサービスがいろいろあります。「所有することが豊かさの証し」という時代は、終わろうとしているのかもしれませんが。

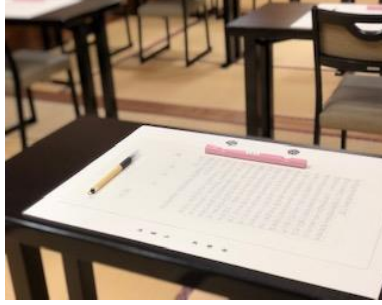
また、禅の持たざる暮らしとは今ブームの断捨離(だんしやり)をすることでもあるのです。断捨離とは、仏教の思想から生まれた「必要のないものを断ち、捨てて、執着することから離れる」という考え方です。

執着を捨て去ることができれば、本当に大切なことが見えてくるのです。そして、知足(ちそく)を知る(こと)です。「吾唯知足」という禅語は、あまり欲張らずに足りてあることを知り

ましようという意味です。自分の器に合った欲で満足し、足りることを知ると心安らかなり楽に生きられます。

断 入ってくる不要なものを断つ
捨 不要なものを捨てる
離 ものの執着から離れる

写経会にご参加下さい



納経代1,000円

天寧寺では、毎月二十八日午後三時から四時半まで写経会を行っています。道具はお寺で用意しておりますので、お気軽にその日から始められます。写経には認知症予防や心を落ち着かせる効果があるそうです。また、亡くなられたご家族の供養の為、ご自身、ご家族の願い事の為に月に一度写経を習慣にしてみませんか？

まだまだお席に余裕がございますので、どなたでもお気軽にご参加下さい。

令和二年 行事予定

- 三月二十日(金) 春分の日
- 春彼岸墓経(平和公園)八時〜十四時
- 永代供養墓合同供養 十三時より
- 八月十日(月) 山の日
- お盆墓経(平和公園)八時〜十四時
- 永代供養墓合同供養 十三時より
- 八月十七日(月) 施食会(天寧寺) 十三時より
- 九月二十一日(月) 敬老の日
- 永代経(天寧寺) 十三時より
- ※永代経申込者のみ参列できます
- 九月二十二日(月) 秋分の日
- 秋彼岸墓経(平和公園)八時〜十四時
- 永代供養墓合同供養 十三時より
- 十二月十五日(火) 三宝大荒神 大祭(天寧寺三宝殿)

平和公園 天寧寺霊苑

平和公園の入口の好立地にある霊苑です
新規墓地分譲中
 ・檀信徒以外でも使用可、宗派不問
 ・詳しくは天寧寺ホームページ又はお電話で

永代供養個別墓(二霊)68万円(写真上)



永代供養合祀墓一霊25万円(写真下)